

## 寶壺山願勝寺における僧侶の修学と書写・所持文献

— 義剛上人・快明上人・快淵上人を取り上げて —

原 卓 志

(キーワード) 寶壺山願勝寺 義剛上人 快明上人 快淵上人 修学

## はじめに

寶壺山願勝寺(徳島県美馬市美馬町願勝寺)は、行基の開基と伝えられる真言宗御室派の大本寺である。当寺には、江戸時代から明治時代にかけて刊行された文献が約四五〇点、一二〇〇冊(帖)、同時期に書写された文献が約五七〇点、六九〇冊(帖)伝存されている。それらの文献は、願勝寺代々の住持やその弟子僧によつて書写され、読み込まれた文献であり、かれらの学習材であり学習記録である。

本稿では、代々の住持の中から、現蔵文献中に多くの文献を遺している中興十六世の義剛上人、二十世の快明上人、二十一世の快淵上人を取り上げ(注1)、それぞれの書写本を資料とし、各人の書写活動について、年次を追って分析することを通して、書写活動の場所や背景について考察する。また、書写本の内容分析と比較を通して、願勝寺における文献の蓄積が、その後の僧侶の修学に影響を与えるのか否かについて検討する。さらに、所持本の内容を視野に加え、三人の修学実態の解明を試みる。

## 一 義剛上人の修学と書写・所持本

願勝寺中興十六世の義剛上人については、十五世の義応法印が寛政二(一七九〇)年五月に遷化している(注2)ことから、その頃に願勝寺住持を嗣ぎ、寛政十

一(一七九九)年七月晦日に遷化したことが知られる(注3)程度で、それ以上の具体的な活動については詳らかでない。願勝寺伝存文献には、義剛上人の書写したことが明らかな文献として五六点が確認できる。そのうち、書写年代が明らかな文献四六点について、書写年代ごとに配列したうえで、誰の本を基に転写したのかによつてまとめると、次のようになる(以下には、誰の本を基にしたのかを示し、↓の後に、文献名、冊(帖・巻)数、所在を掲げ、《》内に書写された日を記した。誰の本を基にしたのか、あるいは、書写の日付の不明なものについては?で示した)。

寛政六(一七九四)年

二月 ? ↓ 『供養法略法則』一冊(1箱32)《一八日》

一〇月 ? ↓ 『傳法灌頂初後夜教授作法』一冊(2箱51)《一三日》

一二月 見心 ↓ 『三摩耶戒初後夜折式(金剛界)』一帖(8箱10)《二五日》

寛政七(一七九五)年

? 月 見心 ↓ 『傳法灌頂誦經導師作法』一帖(2箱40)《?》

一月 ? ↓ 『傳法灌頂蓋幡事』一冊(2箱18)《?日》

『傳法灌頂金剛界式幸聞記』一冊(2箱22)《?日》

『傳法灌頂胎藏界式幸聞記』一冊(15棚42)《?日》

『密宗諸法會儀則』三冊(7箱8)《?日》

見心 ↓ 『三摩耶戒初後夜折式(胎藏界・受者作法)』二帖(8箱10)

《?日》

二月

- 『灌頂』一帖（1箱212）《?日》  
 『教授作法』一帖（2箱40）《?日》  
 『供養法略法則圖解』一冊（1箱54）《?日》  
 『五色加持』一帖（1箱211）《?日》  
 『五瓶加持』一帖（3箱14）《?日》  
 『金剛界』一巻（8箱15）《?日》  
 『胎藏界』一巻（8箱16）《?日》  
 『三寶院灌頂式羯磨文説』一冊（1箱51）《?日》  
 『三摩耶戒儀式』一帖（12棚1）《?日》  
 『誦經表白』一帖（3箱22）《?日》  
 『承仕進退事』一帖（9箱9）《?日》  
 『大阿闍梨受者加持作法』一帖（1箱61）《?日》  
 『傳法灌頂教授作法』一冊（1箱55）《?日》  
 『傳法灌頂三摩耶戒體』一巻（8箱18）《?日》  
 『傳法灌頂壇行事用意 教授要略』一帖（17棚34）《?日》  
 『曼供表白』一帖（1箱210）《二三日》  
 『曼供法則』一帖（1箱209）《二三日》  
 『曼荼羅供略記』一帖（6箱3）《二三日》  
 興雄（見心）↓『結縁灌頂教授進退』二通（9箱8）《晦日》  
 栄鏝↓『灌頂部私目録』一冊（13棚12）《?日》  
 栄伝↓『行法肝葉抄』二冊（15棚13、20棚22）《?日》  
 克辨↓『結縁灌頂三摩耶戒作法<sup>金剛界</sup>』一巻（8箱17）《?日》  
 『結縁灌頂三摩耶戒作法<sup>胎藏界</sup>』一巻（8箱19）《?日》  
 義剛↓『野金抄』一冊（17棚45）《?日》  
 『野胎抄』一冊（17棚44）《?日》  
 『野道抄』二冊（17棚43）《?日》  
 憲秀↓『幸心方 灌頂道具寸法』一冊（2箱3）《二五日》  
 宥雅↓『幸心方 灌頂道具目録』一冊（2箱4）《二五日》  
 ?↓『結縁灌頂記録』一冊（17棚40）《?日》  
 『結縁灌頂式傳授記』一冊（1箱52）《?日》  
 見心↓『結縁灌頂作法』一冊（1箱53）《?日》

- 『結縁灌頂初夜作法』一冊（2箱19）《?日》  
 『結縁灌頂小阿闍梨作法』二冊（1箱203）《六日》  
 栄鏝↓『立燈炷形』一通（3箱12）《?日》  
 真明↓『護身法口決并九事印儀』一冊（20棚19）《?日》  
 南山三寶院御本↓『傳法灌頂三摩耶戒作法』一冊（10棚1）《?日》  
 一〇月 ?↓『三寶院傳法灌頂聞書』五冊（1箱46、2箱75、2箱90）《?日》

義剛上人の書写本には、書写年代と誰の本を基に転写したのかという点で二つの特徴がある。まず、書写年代においては、寛政六（一七九四）年から寛政七（一七九五）年二月までの間に書写されたものに集中しており、四五点に及ぶ。特に寛政七年の一月には三四点、二月には八點の書写が確認でき、この二ヶ月間に大部分の文献を書写している。また、誰の本を基にして転写したのかを見ると、見心の本を転写したと考えられる文献が二四点であり、約半数が見心の本を転写したものである。

見心は高野山南谷の成蓮院の住持であり<sup>注4</sup>、伝存本の奥書から三寶院流（憲深方）を伝えていたことがわかる。次に掲げる『三摩耶戒初後夜折式』三帖（8箱10）は、『三摩耶戒初後夜折式（勝覺／三幸）三巻」と墨書された帙に収められた折本三帖である。その第一帖「金剛界」、第二帖「胎藏界」には巻尾に「三寶院權僧正御作也」とあり、それぞれ次のような奥書・墨書がある。

○『三摩耶戒初後夜折式（金剛界）』（8箱10）

〈奥書〉（前略）

延享五戊辰五月中旬眞源遮梨之以／御本書寫了 沙門實際

天明九年己酉正月廿四日以實際寫得／之本寫了之成蓮院阿遮梨見心

寛政六甲寅十二月廿五日以見心／阿遮梨御本書寫校功了／義剛

〈墨書〉「義剛」（表紙）

○『三摩耶戒初後夜折式（胎藏界）』（8箱10）

〈奥書〉（前略）

延享五載戊辰孟夏中旬眞源阿闍梨／之以御本寫功訖沙門實際／「朱

校畢」（朱）

天明九己酉年正月廿五日以實際之本寫／之畢 幸心末資見心<sup>五十一</sup>

寛政七卯年正月日以右御本寫校功了／義剛

〈墨書〉「義剛」（表紙）

また、第三帖「受者作法」には次のような奥書・墨書がある。

○『三摩耶戒初後夜折式（受者作法）』（8箱10）

〈奥書〉享保十三年戊申春三月謄寫之了／幸心院流末眞源

天明三年癸卯十月廿五日写得之 見心

寛政七乙卯年正月日以右御本写校功了／義剛

〈墨書〉「義剛」（表紙）

『三摩耶戒初後夜式』は醍醐寺三寶院開祖勝覺の著作であり、三寶院流の聖教として伝えられてきたものである。このように、義剛上人は、三寶院流（憲深方）の伝法灌頂に関わる聖教を見心の書写本から転写している。

義剛上人が、寛政六年末から七年二月にかけて、集中的に見心の本を転写しているのは、ちょうどこの時期に高野山に遊学する機会に恵まれたためではなかったかと推測される。『結縁灌頂教授進退』二通（9箱8）は、「結縁灌頂教授進退」と墨書された包紙に、「教授進退」「結縁灌頂小壇略作法」と題される二通が包まれる。そのうち「教授進退」には次のような奥書があり、寛政七年一月末に高野山で興雄（見心の旧名）書写本から転写されたことがわかる。

○『結縁灌頂教授進退（教授進退）』（9箱8）

〈奥書〉「安永二己歳九月中旬以成蓮院眞源閣梨之／御本寫之智天」（朱）

吾先師眞源所持本去九月十九日焼亡故／以智天傳寫之本寫之了成蓮

院興雄／皆安永四乙未年二月五日也

寛政第七龍集乙卯年正月晦日於南山／以右興雄阿闍梨御書寫寫畢／

義剛

また、次に掲げる『傳法灌頂三摩耶戒作法』一冊（10棚1）の奥書からも、寛政七年二月に南山三寶院の蔵書を基に転写したことが知られ、義剛上人がこの時も高野山にあったことが理解できる。

○『傳法灌頂三摩耶戒作法』（10棚1）

〈奥書〉（前略）

享保九歲次甲辰晚秋下旬以城州宇治／惠心院良純大德所持之本令大

法師空／曉写取了 金剛佛子眞源<sup>三六</sup>

「同年十月朔日写本對校了右書注異本／者乃西酉報恩院本而安養院僧正運動／所對校也」（朱）

寛政七乙卯二月日以南山三寶院御本／写校功畢 金剛佛子義剛

さて、高野山遊学中に義剛上人が書写したと考えられる本は、見心のもの以外に次の僧侶の本がある。

義剛…三点 栄鏐…二点 堯辨…二点 栄伝…一点

憲秀…一点 眞明…一点 宥雅…一点

このうち、堯辨・栄伝・宥雅の三人については、詳細不明であるが、『結縁灌頂三摩耶戒作法<sup>金剛界</sup>』（8箱17）の奥書「寶曆十三癸未夏五月借求南山南谷成蓮院眞源／上綱御本同於地藏院會下寫得之畢 照純房堯辨<sup>三七</sup>」、『行法肝葉抄』卷中（20棚22）の奥書「延享三龍次丙寅冬十一月中旬於高野山／西院谷櫻池會下染毫之者也／大法師榮傳<sup>春秋</sup>」から、堯辨と栄伝がそれぞれ高野山で活動していたことは確かである。

栄鏐・憲秀については、次の奥書からいずれも高野山に居住した僧侶であることが知られる（注5）。

《栄鏐…南山北室院》

○『立燈炷形』（3棚12）

〈奥書〉寛政七乙卯二月日以北室院榮鏐師御本写了／義剛

《憲秀…南山総持院》

○『「幸心方」灌頂道具寸法』（2箱3）

〈奥書〉右道具寸法等以水本道場御本寫之／本雖切紙恐散失私集記／惣持院

／憲秀

寛政七乙卯歳正月廿五日以惣持院憲秀御本／書写之了 義剛

義剛の書写本からは、三寶院流の聖教（『四度口訣』）である『野金抄』一冊（17棚45）、『野胎抄』一冊（17棚44）、『野道抄』二冊（17棚43）の三点を転写している。その奥書からは居住した場所等の情報は得られないが、『野胎抄』の奥書には次のようにあり、宝暦九（一七五九）年に六十八歳であったことがわかる。

○『野胎抄』（17棚44）

〈奥書〉宝暦九卯正月廿日以海隆閣梨本轉寫畢／佛性戒比丘六十八老 義剛

寛政七乙卯年正月日以右御本写校功了／義剛

この年齢に注目すると、「佛性戒比丘六十八老義剛」は、正興庵（現在の鳴門市撫養町の正興寺）二世である寂門義剛和尚ではないかと推測される。寂門義剛和尚は、享保十九（一七三四）年十二月に四十三歳で正興庵二世となり、宝暦七

(一七五七)年に職を三世戒琳浄光和尚に譲った。正興庵住持の頃から住持を退いた後も、阿波の各地で灌頂の阿闍梨を務め、多くの僧侶に安祥寺流・中院流・三宝院流の伝授を行い、明和四(一七六七)年五月、七十六歳で遷化した<sup>(注6)</sup>。寂門義剛和尚の年齢は宝暦九年に六十八歳であり、「佛性戒比丘六十八老義剛」の年齢と符合する。ただし、このように義剛上人が寂門義剛和尚の書写本を転写したとすれば、どこで転写したのが問題となる。寛政七年一月の数日間、阿波に帰って正興庵あたりで書写したのであるか。あるいは、寂門義剛和尚の書写本が高野山に伝わっていたのであろうか。この点については、今後さらに検討を要する問題である。

真明の書写本から転写した『護身法口決并九事印儀』(20棚19)の奥書には次のようにある。

○『護身法口決并九事印儀』(20棚19)

〔奥書〕慶安四年二月上旬在江戸之間書寫也／醫王院應遍

寛政三<sup>辛亥</sup>年正月月中旬於阿州葛井寺／剛林寺書写之了／介快翁

同六年甲寅十二月阿州鶴嶋宝福寺主／所持之本借用写之御庵室真明

寛政七年乙卯二月日写之／沙門義剛

真明の詳細とともに、「應遍」「介快翁」「剛林寺」「御庵室」など、本文献の伝写に関わる僧侶や寺院について不明な点があるが、寛政六年に「阿州鶴嶋宝福寺主所持之本」<sup>(注7)</sup>を借用して書写したとすれば、真明は阿波の地で本書を書写したと考えるのが適当であろう。とすれば、義剛上人も本書を阿波の地で書写したのではないだろうか。義剛上人が高野山を去った時期については明確にはしがないが、寛政七年一月に書写した文献の量に比べて、二月に書写した量が四分の一にも満たないことからすれば、二月のうちには阿波に帰ったのではないかと推測される。『護身法口決并九事印儀』は、阿波に帰ってからの書写であると考えて矛盾はない。

以上、書写年代が明らかな写本から、義剛上人の修学実態の一端を考察してきた。このほかに、次に掲げるように、書写年代の不明な写本、義剛上人所持の写本が一〇点見られるが、いずれも加行、伝法灌頂、諸尊法など事相面に関わる聖教の類である。おそらく、これらも高野山遊学時代に書写したものであると考えられる。

## 《加行関係》

『愚見抄』(17棚42)

《伝法灌頂関係》

『灌頂道場圖』(3棚3)

『灌頂部傳受口』(15棚36)

『三摩耶戒教授作法』(2箱2)

『傳法灌頂後夜作法』(1箱24)

《諸尊法関係》

『秘抄』(17棚25)

『三寶院<sup>憲</sup>方傳授并秘鈔聞書』(3棚21)

《そのほか事相関係》

『誦經物帶結様之形』(3棚11)

『名香包形 受者名香包圖』(3棚2)

〔題未詳・事相関係書〕(1箱14)

義剛上人は、寛政六年末から寛政七年の二月にかけて、高野山にあって、三宝院流(憲深方)の聖教の書写(学習)に専念し、多くの写本を願勝寺に持ち帰った。遊学前後の修学については、その頃の書写本がほとんど遺されていないため、その様子を知ることはできないが、少なくとも書写活動に関してはそれほど活発なものではなかったのだらうと推測される。多くの写本を遺すことになった高野山への遊学は、義剛上人にとって修学の喜びに満ちた充実した日々ではなかったかと想像されるのである。

## 二 快明上人の修学と書写・所持本

中興二十世の徳淳房快明上人は、慶応三(一八六七)年九月二十八日、四十六歳で遷化したことがその位牌と、伝存される写本に記載された年齢からわかるが<sup>(注9)</sup>、それ以上の詳細は不明である。願勝寺には快明上人の書写した文献が一五点と、所持したことが明らかな写本六点が現蔵される。書写年代のわかるもの一四点を年代順に配列すると次のようになる(表示方法は第一節と同じ)。

天保八(一八三七)年【一六歳】

一月 ? ↓『伽陀假博士』一冊(16棚22)《?日》

天保一二(一八四一)年【二〇歳】



四月 孝運↓『**万**字觀』一冊（1箱6）《中旬》

弘化四（一八四七）年【二六歳】

六月 智幢↓『神供壇圖 神供次第傳授問書』一帖（4箱30）《六日》

嘉永元（一八四八）年【二七歳】

四月 智幢↓『題未詳（先德名字口傳 眞言院家寺処）』一冊（4箱77）《二八日》

五月 智幢↓『玄秘鈔』四冊（1箱215、4箱26、4箱42）《二二日、六月二八日》

八月 靈雅↓『諸尊要抄』八冊（1箱213、4箱7、4箱29、4箱40）《？日、嘉永二年六月？日》

嘉永二（一八四九）年【二八歳】

五月 靈雅↓『秘藏金寶集』七冊（1箱214、4箱8、4箱9、4箱41）《二九日、七月一八日》

嘉永三（一八五〇）年【二九歳】

五月 宥玄↓『中院四度長淳記』一冊（2箱8）《二七日》

嘉永四（一八五一）年【三〇歳】

十二月 ？↓『三種灌頂並五種三摩耶』一冊（13棚11）《？日》

嘉永五（一八五二）年【三一歳】

一月 勝広↓『金剛界發慧抄』三冊（15棚38、2箱1、2箱21）《二日、六月二三日》

二月 智幢↓『醍醐鈔』一冊（17棚10）《二五日・快淵に書写させる》

九月 『釋論名目隨聞記』一冊（4箱10）《下旬・能化高野山阿弥陀院隆僊》

文久四（一八六四）年【四三歳】

一月 ？↓『理趣經愚解鈔』（卷第二）一冊（14棚40）《元旦・補写》

慶応元（一八六五）年【四四歳】

七月 智幢↓『平水大事』一帖（1箱65）《二九日》

まず、快明上人の書写活動の時期について見ると、弘化四（一八四七）年から嘉永五（一八五二）年にかけて、充実していたようであるが、義剛上人のように短期間に集中して多数の文献を書写することはなかったことがわかる。次に、快明上人が誰の本を基に転写したのかについて見ると、智幢の写本が五点、靈雅の

写本が二点、そして勝広・宥玄・孝運の写本がそれぞれ一点ずつ見られる。

転写点数の最も多い智幢については、『玄秘鈔』四冊（1箱215、4箱26、4箱42）の奥書から、阿波美馬郡（現在のつるぎ町一宇明谷）一宇山西福寺の住持であったことがわかる。

○『玄秘鈔』（1箱215、4箱26、4箱42）

（卷一奥書・4箱26）

（前略）

維文化六己巳年八月日書之了／阿州麻植郡山崎開敷山現證庵／小苾芻慧嚴／「又朱交了」（朱）

維文化八辛未年四月以他筆令書寫了／阿州美馬郡小嶋村本樂寺徳門

天保六年乙未十一月九日書寫功了／同国同郡一宇山西福寺／沙弥智幢

嘉永元龍集戊申五月廿二日／願勝寺現主／快明／寫之畢 「朱押紙等了」（朱）

また、『權少僧止佐伯快淵履歷』（第三節に全文を掲出する）によれば、嘉永三（一八五〇）年八月晦日に願勝寺において、快明上人の弟子にあたる快淵上人に菩薩戒を授けている。快明上人は智幢から親しく教えを蒙り、智幢の書写した文献を転写することを許されたのであろう。

靈雅については、次の奥書から、東予川之江宝積寺住持の英峯<sup>注10</sup>を「師主法師」と呼び、仮名を恵亮房と称した僧侶で、天保三（一八三二）年に三十四歳であったことがわかる。東予宇摩郡寒川村（現在の四国中央市）の普門院神宮寺の住僧であったが、天保十三（一八四二）年には、阿波美馬郡の大滝寺（現在の美馬市脇町）に住していたことがわかる。

○『秘藏金寶集』（1箱214、4箱8、4箱9、4箱41）

（第十奥書・4箱41）

（前略）

享保十五庚戌年春從辨秀法印傳授畢／信源

延享四丁卯年初夏從田秀法印傳受授合了／秀精

天保三辰二月二日以師主法師英一御本書／写了 爲心覺高頂居士樂

順居士追善／耳 東豫宇戸郡寒川普門院／沙弥靈雅<sup>三十四</sup>

嘉永二年己酉天初秋十有八日書／寫了 阿州美馬郡郡里村願勝寺住

侶／法印快明<sup>八十</sup>

○『諸尊要抄』（1箱<sup>213</sup>、4箱7、4箱29、4箱40）

〈卷二奥書・1箱<sup>213</sup>〉

建長二年四月十六日賜極樂房御本／書写之畢／求法沙門顯成<sup>廿一</sup>

延享四丁卯年七月傳受校了／秀精

文化四年丁卯十月令書写了／宝積寺英峯

天保四癸巳七月七日書写了／沙弥靈雅

嘉永元戊申八月日令人寫／願勝寺現主法印快明

〈卷六奥書・1箱<sup>213</sup>〉

（前略）

建長二年五月八日賜極樂坊御本／書写了／求法沙門顯成<sup>廿一</sup>／「校

合了」（朱）

延享四丁卯年烹葵傳受校了／秀精

天保四癸巳年七月十二日師主法印以御本／書写功了 神宮寺住侶／

靈雅<sup>廿五</sup>

嘉永二歲在己酉天五月廿日書写之了／願勝寺住侶／快明<sup>廿八</sup>

○『傳法灌頂晝夜記』（2箱<sup>12</sup>、2箱<sup>25</sup>）

〈上卷奥書・2箱<sup>12</sup>〉

文政五年<sup>壬午</sup>二月十一日写畢 妙嚴房英峯

天保十三寅年七月十日使人書写了／阿州城北美馬郡大滝寺／惠亮房

靈雅

嘉永五壬子年正月十二日於宝壺山之禪室写之了／同日朱書等了 願

勝寺資／惠紹房快範

〈下卷奥書・2箱<sup>25</sup>〉

文政五年壬午春二月仏涅槃日写之畢 宝積寺英峯

天保十三寅年七月十二日写之畢 大滝寺靈雅

嘉永四年辛亥年十二月廿三日写之了 願勝寺資快範<sup>十九</sup>

「同五年壬子正月十二日朱書等了」（朱）

勝広は、次の『金剛界發慧抄』三冊（15棚38、2箱1、2箱21）の奥書から、阿州三好郡長善寺（現在の東みよし町中庄）に止住する僧侶で、文政十一（一八二八）年に六十一歳であったことが知られる。また、靈雅と同様に宝積寺住持の

英峰の書写本を転写している。

○『金剛界發慧抄』3冊（15棚38、2箱1、2箱21）

〈卷下奥書・15棚38〉

（前略）

文化五年戊辰十二月以他筆写功了／宝積寺住持／金資英峯

文政十一戊子十月二十六日寫功畢／阿州三好郡長善寺閑居／法印勝

廣<sup>六十有</sup>

「十一月三日朱校了」（朱）

嘉永五壬子六月廿三日秋風始入閑林之日於方室之南書院揮毫畢／願

勝寺主／快明德淳房<sup>卅一</sup>

「翌廿四日正巳牌朱校了」（朱）

有玄の写本を転写した『中院四度長淳記』一冊（2箱8）の奥書からは、有玄がどこの寺院に居住していたかの情報は得られない。ただ、有玄もまた靈雅・勝広と同じく宝積寺住持の英峰の書写本を転写していることからすれば、東予から阿波北西部に位置する寺院の住僧ではなかったかと推測される。

○『中院四度長淳記』（2箱8）

〈奥書〉 本云／于時永正<sup>參</sup>年三月廿八日記之了

于時文化六己巳年秋九月廿六日以南山／南院宝庫本書写一校了／寶

積寺妙嚴房英峯

天保十三壬寅年六月二日書写了／金剛末子<sup>秀應房有玄</sup>

嘉永三歲在庚戌中夏十七日書写之了／願勝寺幻住德淳房快明

最後に孝運の本を転写したと考えられる『凡字觀』一冊（1箱6）の奥書からは、孝運についての情報は得られないが、快明上人が天保十二（一八四一）年二十歳の時に高野山に遊学し、北室院で書写したことが知られる。

○『凡字觀』（1箱6）

〈奥書〉 右此ノ一卷者御室尊壽院寶庫ニ在レ之ヲ拝借書ニ寫之一了ノ孝運判

天保十二丑初夏中旬／於于南山北室院槐林書之畢／仏子／德淳房乞

士

快明上人の書写した文献の中で、高野山遊学時代に書写したことが確認できるのは、この一点のみであり、高野山遊学時期に多数の文献を書写した義剛上人とは異なる。

以上のように、快明上人の転写の基となった文献（親本）の持ち主（書写者）の大部分は、願勝寺周辺地域の寺院に止住した僧侶である。このことから、快明上人の書写活動の場は、願勝寺あるいは、その周辺地域の寺院にあったと考えられる。

快明上人の書写した文献の内容を見ると、主として加行、灌頂、諸尊法などの事相面に関する文献が多く、義剛上人の書写した文献の内容に近い。ただし、義剛上人の書写した本と重複して書写した文献は見られない。また、義剛上人の場合には三宝院流（憲深方）の文献が中心であったが、快明上人には、それに加えて中院流の聖教をも書写している。嘉永元（一八四八）年から翌二年にかけて、三宝院流で「後三部（後三部鈔）」と呼ばれる諸尊法に関する聖教『玄秘鈔』『諸尊要抄』『秘藏金宝集』（いずれも実運撰）を書写した後、嘉永三年には長淳の四度次第口訣である『中院四度長淳記』を書写しているのである。これは、三宝院流の伝授を終えた後、引き続き中院流の伝授に移っていったことを反映しているのではないかと考えられる。

このような事相面の学習に関わる写本とは別に、嘉永五（一八五二）年には教相面に関わる写本が見られる。

○『釋論名目隨聞記』（4箱10）

〈奥書〉（ナシ）

〈墨書〉「嘉永五壬子／九月下旬」（表紙）

「食會／德淳房」（表紙）

「能化高野山阿弥陀院／隆僊師」（表紙）

右は、表紙の墨書から嘉永五年九月下旬に高野山阿弥陀院の隆僊を能化として開講された『釋論名目』についての講伝を聴講した際の聞き書きであることがわかる。ただし、教相面に関する学習は、この時期から開始されたというわけではなく、高野山に遊学していた頃からすでに始められていたようである。願勝寺には、快明上人の署名を有していることから、所持した文献であると判断できる『釋摩訶衍論記』六冊（1棚3）、『釋摩訶衍論通玄鈔』四冊（1棚4）、『釋摩訶衍論贊玄疏』四冊（1棚4）の板本三点が遺されている。このうち『釋摩訶衍論通玄鈔』巻第一（2棚64）の表紙見返しには、「北室院會下／德淳房」の署名があり、巻二～四（1棚5）の三冊、および『釋摩訶衍論記』六冊（1棚3）、『釋摩訶衍論贊玄疏』四冊（1棚4）には「北會／德淳房」の署名がある。このこと

から、これら『釋摩訶衍論』の注釈書である板本三点は高野山遊学中に入手し、それ以来、事相面の学習と平行して、『釋摩訶衍論』に関する学習が進められていたことが推測されるのである。また、『理趣經愚解鈔』五冊（14棚40）は、巻一と巻三～五の四冊は万治二（一六五九）年刊行の板本であるが、巻二については文久四（一八六四）年に快明上人が補写したものである。すなわち、文久四年には『理趣經』に関する学習も進められていたことがわかる。その奥書には次のようにある。

○『理趣經愚解鈔』巻第二（14棚40）

〈奥書〉愚解鈔全本雖爲五卷當院藏庫之本四卷存在而／失於第二之卷是故所用不爲予書寫以補闕本／焉魚魯之寫誤後哲正之矣／文久第四甲子元

旦竹林閑房沙門快明瞻寫之畢

この奥書からは、快明上人自らの研鑽のための書写であるとともに、後学の者たちのために、基本的な注釈書（学習材）を願勝寺に蓄積しようとする教育者としての意図がうかがえる。

### 三 快淵上人の修学と書写・所持本

願勝寺中興二十一世である快淵上人については、明治四十一年五月に七十五歳で遷化し、能書家で松堂と号した（注1）ことのほか、『權少僧正佐伯快淵履歷』一冊（6棚21）によって、かなり詳しい情報が得られる。以下にその全文を引用する（適宜、句読点を補い、破損部分は□とする。行間の注釈は「」に包んで本行に入れた）。

○『權少僧正佐伯快淵履歷』（6棚21）

權少僧正佐伯快淵履歷

快淵、阿波國美馬郡重清村、天保五年十月廿一日夜出生ス。父三宅吉郎公次、（幼名熊三郎ト稱ス）母ハ全郡里村曾我部平作之女、名ハ楨女ト稱ス。三男五女ヲ生ス。長女ヲ稱常。三宅與右衛門ニ嫁ス。二女ヲ樂ト稱ス。豆成鹿之助ニ嫁ス。長男六郎ト稱ス。三宅家ヲ相續ス。三女ヲ良ト稱ス。二十四載ニシテ死亡ス。四女ヲ龜ト稱ス。吉村立右衛門ニ嫁ス。五女ヲ辯ト稱ス。藤澤谷藏ニ嫁ス。次男ヲ俗名熊三郎ト稱ス。十四載ニシテ弘化四年丁未十月廿日寺入、同年十二月朔日同寺貫首法印快明上人ニ隨ヒ薙髮授

戒シ、實名ハ快淵、假名寛淳ト稱ス。三十載ニシテ文久三年癸亥十月三日願勝寺ヲ嗣住ス。三男ヲ貫一ト稱ス。工藤文左衛門之養子ト成ル。

・得度 弘化四年丁未十二月朔旦、美馬郡々里村願勝寺道場ニライテ、同寺貫首法印快明上人ニ随ヒ雜染授戒ス。

・菩薩戒 嘉永三年庚戌天八月晦日、願勝寺道場ニライテ、一字山前西福寺權僧正智幢阿闍梨ニ授戒ス。

・傳法許可灌頂 嘉永四年歲次辛亥四月十一日角宿日曜願勝寺道場ニライテ、法印快明ニ随ヒ、傳法許可灌頂授受ス。

・傳法灌頂 全年四月十二日月曜全寺全師ニ授受ス。

・□寂戒 嘉永四年辛亥天十月廿六日、三好郡加茂野宮□万念山滝寺道場ニオキテ、板野郡矢武村莊嚴院主隆鎮阿闍梨ニ受ク。

・苾芻戒 慶應四戊辰四月十四日申上分、願勝寺道場ニオキテ、莊嚴院貫首旭隆應和尚ニ受ク。

一住職 文久三癸亥十月マ亨年三十歲ニテ拜命。明治廿七年一月辭職。且ツ太田村万福寺ヲ兼務住職〔明治十七年ヨリ廿七年マテ凡十一ケ年間〕。并々京都上御靈前町京極寺ヲ兼務住職ス〔同廿一年頃ヨリ廿七年迄〕。同卅年十二月徳島縣名東郡八万村大字下八万村長久寺ヲ住職ス。

□昇級 (記載なし)

□從弟教育 津田昌淳、長江快敬等、凡十五人。左ニ(以下記載なし)一學籍 高野山北室院

一興隆 願勝寺方丈庫裏大門等、新築或宮繕、凡三千円。佛具書籍凡三百円。地所地直シ凡百円。諸木植付五十円。田畑地直シ買求或ハ開拓四町七反。

願勝寺には、快淵上人の所持していた写本一〇一点が現蔵される。内訳は、快淵上人自身の書写が確認できる写本が二六点、他の僧侶の書写本を譲り受けたと見られるものが三二点、快淵上人の書写したものか、譲り受けたものか不明(ただし快淵上人所持本であることが明確)である写本が四三点である。書写年代のわかる写本を年代順に配列すると次のようになる(表示方法は第一節と同じ)。

安政五(一八五八)年【二五歳】

五月 有天↓『**文字觀口決**』一冊(1箱50)《二六日》

智幢↓『阿字觀類集』二冊(1箱25)《二九日》

万延元(一八六〇)年【二七歳】

四月 ?↓『密宗仏身建立鈔』一冊(14棚14)《下旬》

五月 ?↓『理趣經開題 同末鈔目錄』一冊(14棚18)《?日》

『理趣經文前義門分別』一冊(7棚32)《一日》

『真言名目』一冊(13棚15)《初旬》

『理趣經文前分別』一冊(2箱26)《下旬》

万延二(一八六一)年【二八歳】

二月 觀道秀傳↓『即身義幼學鈔』一冊(2箱106)《晦日》

文久二(一八六二)年【二九歳】

五月 ?↓『出家大意鈔』二冊(6棚23、9棚11)《?日》

聖雄覺禪↓『即身義科目』一冊(2箱47)《六日》

閏八月 聖雄覺禪↓『二教論玄談』一冊(13棚7)《九日》

文久三(一八六三)年【三〇歳】

六月 ?↓『悉曇字母』一冊(6棚25)《二三日》

元治元(一八六四)年【三一歳】

?月 『大法事過去帳』一冊(14棚24)《?日》

慶応二(一八六六)年【三三歳】

一二月 ?↓『磨光韻鏡』一冊(2箱72)《二二日》

明治五(一八七二)年【三九歳】

八月 『淨財喜捨法名施主名』一冊(3箱51)《?日》

明治一一(一八七八)年【四五歳】

五月 『授菩薩戒名面簿』一冊(6箱7)《二四日》



明治三三（一九〇〇）年【六七歳】

八月 隆雄↓『授菩薩戒儀』一冊（15棚20）『二二日』

明治三六（一九〇三）年【七〇歳】

五月 ?↓『大師口決』一冊（2箱95）『二〇日』

智賢↓『阿字觀作法』一冊（1箱5）『五日』

明治三九（一九〇六）年【七三歳】

四月 ?↓『理趣經曼荼羅略圖 理趣經十七尊義述』一冊（2箱31）

『六日』

快淵上人の写本についても、いずれかの時期に集中しているわけではなく、安政五（一八五八）年二十五歳の時の写本を初期のものとして、明治三十九年七十三歳の時のものが遺されている。このように、生涯をかけて書写活動が続けるといふ点では、快明上人と同様の修学スタイルであるといえよう。『權少僧正佐伯快淵履歷』の「學籍」欄に「高野山北室院」とあることから、快淵上人も高野山に遊学したことは明らかであるが、高野山遊学時代に書写した文献は確認されない。

次に掲げる『阿字觀類集』二冊（1箱25）は、菩薩戒の師である一字山西福寺權僧正智幢阿闍梨の写本を借り受けて転写したものであるが、おそらく願勝寺において転写したのであろう。

○『阿字觀類集』（1箱25）

〈奥書〉（前略）

茲歲傳受阿字觀法則於高野山三寶院上綱寬雄師了／入寺旭靈

天保三壬辰年冬十二月朔旦書寫了／阿北一字山西福寺智幢房

安政五戊午五月廿九日智幢阿闍梨ヨリ拝借シテ謄寫了／願勝寺資快

淵寛淳房

『即身義幼學鈔』一冊（2箱106）は、萬福寺<sup>〔注12〕</sup>の蔵本である觀道の書写本を転写したものである。これはおそらく、萬福寺に足を運んで書写したのではないかと思われる。また、文久二（一八六二）年に書写した『出家大意鈔』二冊（6棚23、9棚11）は、大滝山<sup>〔注13〕</sup>に寓居していた時のものである。さらに、快淵上人が書写したものではないが、『方除御守』一冊（20棚3）の奥書から、文久三（一八六三）年九月には來福寺<sup>〔注14〕</sup>に出かけたことがわかる。

○『即身義幼學鈔』（2箱106）

〈奥書〉（前略）

慶長二年七月六日以遍照光院御本寫之了／三藏院賴慶<sup>卅五</sup>

〔賴慶私勘〕（省略）

皆天保二歲舍辛卯新秋節後之日於逍遙園／清風漫々北窓之下寫了／

萬福密寺觀道字秀傳

萬延二辛酉年二月晦日以萬福寺本書寫之了／求法末資快淵寛淳房

○『出家大意鈔』（6棚23、9棚11）

〈奥書〉 皆文久二戌年夏五月大瀧山寓居之硯書寫了／阿陽城北勤息沙門寛淳

（花押）

○『方除御守』（20棚3）

〈奥書〉 右／嘉永二己酉年秋九月／三寶院傳授ノ硯／隆鎮和尚ヨリ授畢／隆祥

（花押）

文久三癸亥年秋以九月二十有七日於／顯潮山來福密寺道場／傳燈大阿闍梨耶隆祥尊師ヨリ授畢／快淵（花押）

このように、快淵上人は願勝寺で書写を行うほか、阿波国内の各地の寺院に足を運び、書写活動（学習活動）を行っていることが確認できる。

次に、書写した文献の内容を見ると、事相面に関わる文献は、安政五（一八五八）年書写『**阿**字觀口決』『阿字觀類集』のほか、文久三（一八六三）年書写『方除御守』、明治三十三（一九〇〇）年書写『授菩薩戒儀』、明治三十六（一九〇三）年書写『大師口決』『阿字觀作法』の六点にとどまり、書写した文献量に比して、さほど多いとは言えない。しかし、事相面に関する写本が少ないことをもって、快淵上人が事相面の文献を読んでいなかったということにはならない。たとえ、次掲の『醒聞鈔』一冊（17棚10）は、嘉永五（一八五二）年十九歳の時に快明上人の命を受けて書写したものである。書写し終えた文献は快明上人の所持本となっただろうが、書写することを通して、本書を読み通すことができたはずである。

○『醒聞鈔』（17棚10）

〈奥書〉 於上西東坊<sup>今ノ光臺院也</sup>受師主弘鑑之御口決記之者也／和州三輪大

智院／資良英

元龜元庚午十一月十五日於東大寺蓮乘院書之／入寺寅清

文政十一年正月初二日校合畢／末資隆鎮

嘉永三年庚酉正月写之一校畢／智幢

嘉永五壬子二月廿五日令小弟寛淳房寫之畢／願勝寺主快明

また、快明上人の書写（あるいは所持）した本を譲り受けたと考えられる文献として、いずれも表紙に快淵上人の署名を有する『**凡**字觀』一冊（1箱6）、『玄秘鈔』四冊（1箱25、4箱26、4箱42）、『諸尊要抄』八冊（1箱23、4箱7、4箱29、4箱40）、『通用字輪觀』一冊（1箱37）がある。

○『**凡**字觀』（1箱6）

〈奥書〉（前略）

天保十二丑初夏中旬／於于南山北室院槐林書之畢／仏子／徳淳房乞

士

〈朱印〉「阿北／願勝密寺／法印快淵」（單郭長方印、表紙）

〈墨書〉「阿陽／清閑院快淵／所有（印）」（表紙）

○『玄秘鈔』（1箱25、4箱26、4箱42）

〈卷一奥書・4箱26〉

（前略）

嘉永元龍集戊申五月廿二日／願勝寺現主／快明／寫之畢 「朱押紙

等了」（朱）

〈墨書〉「快明資／快淵有」（表紙）

「快明」（扉）

○『諸尊要抄』（1箱23、4箱7、4箱29、4箱40）

〈卷二奥書・1箱23〉

（前略）

嘉永元戊申八月日令人寫／願勝寺現主法印快明

〈墨書〉「快明資／快淵有」（表紙）

○『通用字輪觀』（1箱37）

〈奥書〉（ナシ）

〈朱印〉①「阿北／願勝密寺／法印快淵」（單郭長方印、表紙）

②「寛淳」（双郭方印、表紙）

〈墨書〉「快明」（表紙）

「今ハ嗣弟／快淵有（印①②）」（表紙）

『授菩薩戒儀』一冊（11棚19）は、前表紙に「願勝寺現主／快淵」と墨書され、次のような奥書を有する。

○『授菩薩戒儀』（11棚19）

〈奥書〉安永八年己亥歲夏五十三日以／「阿遮梨耶」（別筆）密門之本書寫畢

四歲苾芻戒倣謹識

嘉永五壬子二月十二日智幢老師之以書寫之本令小弟敬淳膳寫了／願

勝寺主「快淵」（別筆）

奥書の「快淵」は「安永八年：願勝寺主」とは別筆であり、「快淵」はもとの署名を擦り消して書かれている。擦り消された元の名前は読み取れないが、嘉永五年当時の願勝寺住持は快明上人であることから、元々は「願勝寺主快明」とあったと考えられる。快淵上人が快明上人から譲り受け、願勝寺住持を嗣いでから、自らの名を署名したのであろう。本書には、次第本文の道場・日付が記される部分に「阿州美馬郡大字郡里村寶壺山願勝寺戒道場ニシテ」「明治廿七年陰曆七月十二日」という墨書付箋（快淵上人の筆跡であると見える）が貼付されている。明治二十七年に授戒の儀式が行われ、その際に本書が使用されたことを示している。

快淵上人の事相面に関わる書写本が少ないのは、師である快明上人の書写本を譲り受け、それらの文献を読むことを通して、事相面の学習を行ったことによるのではないかと考えられる。また、義剛上人の書写した文献と、快明上人の書写した文献、さらに快淵上人の書写した文献の三者の間に重複がないことからすると、快淵上人は、快明上人から譲り受けた写本だけではなく、義剛上人など、代々の先師が遺した写本にも目を通し、自らの事相面の学習に利用していたのではないかと推測される。つまり、先師の遺した写本を読みつつ、新たな（異なる）文献を転写補充するということが繰り返されて、願勝寺（修学の場合）には、重複することなく多様で豊富な事相面の写本（学習材）が蓄積されていったと考えられるのである。ただし、『薄双紙』所収の個々の供養法などについては重複して伝存している。これは、傳法灌頂・一流伝授などの儀式と関係していると思われるが、重複の有無とその背景について、なお検討していく必要がある。

事相面に関する写本が少ない反面、快淵上人は、多くの教相面の学習に関わる写本を遺している。まず、万延元（一八六〇）年五月には『理趣經』に関する学習に専念していたと見られ、『理趣經開題 同末鈔目錄』一冊（14棚18）、『理趣

經文前義門分別』一冊（7棚32）、『理趣經文前分別』一冊（2箱26）を書写している。奥書や署名はないが、『理趣經分科 全宣然師』一冊（7棚33）も筆跡から見て、万延元年の写本と一具のものではないかと判断される。これが当たっているとなれば、宜然を能化として万延元年に開講された講伝を聴講した際の写本であると考えられる。このほかに、同年五月初旬には『眞言名目』一冊（13棚15）を書写している。万延二（一八六一）年二月には万福寺にて観道の書写本から『即身義幼學鈔』一冊（2箱106）、文久二（一八六二）年五月には、大滝山で『出家大意鈔』二冊（6棚23、9棚11）、聖雄の書写本から『即身義科目』一冊（2箱47）、閏八月には同じく聖雄の書写本から『二教論玄談』一冊（13棚7）を書写している。文久三（一八六三）年には梵字の手習いのために『悉曇字母』一冊（6棚25）を書写している。このように、万延元年から文久三年までは、積極的に教相面の学習に関わる文献の書写を行っている。

文久三年十月に願勝寺住持を嗣いでからは、元治元（一八六四）年の『大法事過去帳』一冊（14棚24）、明治五（一八七二）年の『淨財喜捨法名施主名』一冊（3箱51）、明治十一（一八七八）年の『授菩薩戒名面簿』一冊（6箱7）のような住職・授戒の師としての職務に関わる文献が遺されるほか、明治十三（一八八〇）年の『正風俳諧案方之七名舞 附方々八體并證句』一冊（13棚17）、『正風俳諧式』一冊（1箱31）のような趣味の俳諧に関する文献を書き著している。明治十四（一八八一）年には再び、密恵を能化として開講された『理趣經』の講伝を聴講したようで、『理趣經分科』一冊（2箱55）を遺している。

明治二十七（一八九四）年に願勝寺住持を辞し、明治二十八（一八九五）年六月に書写された『見聞隨身録』一冊（2箱108）、『隨聞記』一冊（2箱68）は、『阿字觀』の講伝を聴講した際の聞き書きであり、『律園清規』一冊（15棚3）も講演の聞き書きである。『律園清規』の表紙墨書には「廿八年陰六月十七日／御門跡御口拜聴者快淵」とあるのみで、誰の講義を聴講したのかが記されていないが、『律園清規』の著者である栄厳が明治十七（一八八四）年から明治三十二（一八九九）年まで仁和寺門跡であったことから、栄厳自ら行った講義を聴講したものと考えられる。また、栄厳が高野山で『阿字觀』を修した<sup>（注15）</sup>ことから、同年の『見聞隨身録』『隨聞記』（いずれも『阿字觀』に関する聞き書き）も栄厳の講義を聴講した時のものであると推測される。そして、明治三十九（一九〇六）年七十三歳の時には『理趣經曼荼羅略圖 理趣經十七尊義述』一冊（2箱31）を書写してい

る。

教相面に関係する文献が書写された時期を見ると、願勝寺住持の職を嗣いだ文久三（一八六三）年十月以前と、辞した明治二十七（一八九四）年以降のものが多。これは、願勝寺住持としての日々の職務を全うするためには、願勝寺の外へ足を運び、各地で開催される講伝を聴講したり、他寺にしばらく逗留して、文献を書写することを通して学習するような暇が得られなかったことが理由であるのかもしれない。

快淵上人が書写した文献のほかに、他の僧侶が書写したり所持していた写本を譲り受けたと考えられるものに、次のような文献がある。元の持ち主（元の所蔵寺院）ごとにまとめて掲げる<sup>（注16）</sup>（快明上人から譲り受けたもの五点については前出につき省略する）。

快心成々道人（一点）：『雅俗狂詠談草』一冊（4棚8）

覺芽（二点）：『即身義補闕問題』四冊（7箱3）、『般若心經秘鍵問題』二冊（13棚38、20棚23）

寛悟（一点）：『神宮秘傳問答』一冊（17棚33）

深亮（一点）：『悉曇字記講用』一冊（7箱6）

泰雄（一点）：『眞言宗法衣之事』一冊（8棚B16）

琢心房（一点）：『宗義論手帳』一冊（1箱15）

鉄周（一点）：『即身義開蒙捷圖』一冊（14棚23）

宥長（一点）：『作法集口訣』一冊（7箱18）

龍環哲心房（一点）：『吽字義問題』二冊（12棚8）、『伽陀假博士』一冊（16棚11）、『言屑談塵記』一冊（2箱49、3箱34）、『釋摩訶衍論義立集目次』一冊（2棚27）、『遮那經王疏傳』一冊（1箱13）、『十地仏果』一冊（20棚5）、『宿曜要訣』一冊（13棚44）、『即身成佛義問題』二冊（6棚16）、『秘藏寶鑰卷上問題』二冊（12棚3）、『菩提心論三摩地段抄』一冊（4棚7）、

『菩提心論不忘録』一冊（17棚5）

隆祥（二点）：『悉曇十八章双紙』一冊（5箱10）、『方除御守』一冊（20棚3）

3）

隆憚（一点）：『宿曜經并曆象偏科文』一冊（17棚14）

大滝山（一点）：『渭水間見録拔書』一冊（2箱103）

明王寺（一点）：『秘密要鑑』一冊（15棚21）



不明（一点）：『刊律攝序之引據 同附言引據 同字考』一冊（1箱34）

『作法集口訣』『方除御守』のような事相面の学習に関する文献も含まれるが、多くは教相面の学習に関する文献である。この中で、龍環哲応房の書写・所持した文献が一点と多いことには注目される。龍環の書写・所持した文献は、右の一点のほかに、二五点が現蔵されている。龍環哲応房が書写した文献で、年代の最も新しいものが、慶應四（一八六八）年閏四月廿八日書写の『大阿羅漢難提蜜多羅法住記』一冊（20棚11）であることから、慶應四年以降に、これら龍環哲応房の書写・所持本をまとめて譲り受けたのであろうが、その間の事情については不明である。また、三六六にのぼる龍環哲応房の書写（所持）本のうち、右の一点に対して快淵上人が署名したのは、単なる偶然の所為であるのか、あるいは意図的な所為であるのかということについても、現段階では不明である。しかし、少なくとも署名された文献については、快淵上人が手に取って読んだ（学習した）文献であろうと考えられる。

このほかに、快淵上人の書写したものか、譲り受けたものか不明ではあるが、快淵上人の所持したことが明らかな写本が四三点見られる。これらには、『**五**字觀法要』一冊（1箱4）、『胎藏界加行作法』一通（1箱95）、『秘事折紙』三冊（5棚29、1箱45）のような事相関係の文献を含みつつ、教相関係では『天廬上人述〕眞言安心小鏡禪要餘稿』一冊（10箱18）、『二乗行果大綱之説』一冊（7棚39）などがある。また『聲明集私案記』二冊（14棚11、2箱76）、『唯密聲明諸家口傳之事』一冊（1箱38）などの声明に関する文献や、『悉曇考試秘鈔』一冊（1箱23）、『悉曇字記問誌』二冊（3箱40）などの悉曇関係の文献、『八幡大菩薩縁起』一冊（15棚35）、『音韻秘用録』一冊（10箱16）、『家相秘鑑』一冊（3箱48）のような縁起、音韻、相法に関わる文献も含まれる。さらに、快淵上人の署名がある一五九点の板本にも注目される。これら板本には經典類、その注釈書や宗義に関する解説書、悉曇・声明関係書、高僧の伝記・寺院縁起などの仏教に関する文献はもちろんのこと、漢籍や中国・日本漢詩文集、医学や建築関係書にいたるまで、実に様々な分野の文献が含まれている。

学習のために願勝寺から遠く離れることが許されなかった住持時代、他の僧侶から譲り受けたこれらの写本や、様々な分野の板本を読むことを通して、快淵上人は、幅広い知識と教養を身につけ、学問を積み上げていったのであろう。これらの文献群から、僧侶として事相面・教相面に熟達するだけでなく、地域を代

表する教養人であった快淵上人の姿が浮かび上がってくる（注17）。

## おわりに

願勝寺に伝存される文献を資料とし、願勝寺中興十六世義剛上人、二十世快明上人、二十一世快淵上人の三人を取り上げて、それぞれの修学状況を考察した。資料の制限から、その全貌を明らかにするには至らなかったが、三人それぞれの書写活動について年次を追って分析することを通して、書写活動の場所や背景については明らかにしえた。また、書写した文献の内容の分析から、寺院における事相面の学習に関わる文献（写本）の蓄積が、その後の僧侶の事相面に関わる文献の書写活動や、教相面での修学に影響を与えるのではないかということを述べた。

今後は、願勝寺以外の寺院において活躍した僧侶についても調査し、願勝寺の事例と比較考察するとともに、周辺地域における僧侶同士の交流実態についても明らかにしていきたい。これらの課題解明のためには、個々の寺院に遺された写本・板本について一点一点調査し、目録・索引を作成するなど、手間と時間を要する作業が不可欠であるが、近世から明治時代に至る僧侶の動的な修学実態の描出を目指して地道に取り組んでいきたい。

## 注

（1）以下、願勝寺の伝存文献についての引用等は、『寶壺山願勝寺所蔵文献目録』（原卓志・梶井一暁・平川恵実子編、平成二十四年三月）を基に述べる。伝存文献中に書写本・所持本を遺した願勝寺住持は、取り上げた三人のほかには次の五人がある。伝存文献名とともに掲げる。

七世 勢儀上人：貞享四（一六八七）年十一月遷化

『高野大師行狀圖畫』（7棚15）板本

『破邪顯正記』（8棚B12、17棚11）板本

八世 義洞上人：宝永七（一七一〇）年三月遷化

『光明眞言經鈔』（2棚30）板本

『行法肝葉鈔』（11棚23）板本



『憲カネやぐら萬言鈔』(8箱13) 写本《元禄八(一六九五)年書写》  
九世 宥專上人：享保三(一七一八)年五月遷化

『古佛修幅撥遣勸請表白』(4箱64) 写本《延宝二(一六七四)年書写》

『弥勒法』(4箱65) 写本

『西谷名目』(角I箱5) 板本

『遺跡講式 舍利講式』(角II箱17) 板本

十八世 快導上人：天保十三(一八四二)年二月遷化

『明牌靈名記』(8棚B18) 写本

『憲深方傳授私目録』(2箱13) 写本

十九世 快遵上人：明治七(一八七四)年七月遷化

『翻譯名義集』(7棚2) 板本

(2) 願勝寺伝存の位牌による。位牌には「**カ**大阿闍梨義剛上人不生位」「寛政二庚戌年五月十七日」とある。

(3) 願勝寺伝存の位牌による。位牌には「**カ**大阿闍梨義剛上人不生位」「寛政十一未年／七月晦日」とある。

(4) 『金剛峯寺諸院家析負輯』(『續真言宗全書』第三十五、續真言宗全書刊行会、昭和五十二年二月) 所収の『成蓮院歴代先師名簿』には、「前權少僧都見心」として「文政二年己卯十二月廿五日入寂。師初號興雄龍遍房。後改見心正等。當國伊都郡神野邑之人。元文二年從于當院快雄遮梨雜染受戒焉。(以下略)」とある。

(5) 榮鏝については、注(4) 文献所収『北室院歴代系譜寫』に「阿闍梨榮鏝順識房／武州之産人也。天明五乙巳年八月十八日入寂」とある。

(6) 吉田寛如編著、『正興寺』(正興寺開創二百五十周年記念会、昭和四十九年十一月) による。

(7) 「宝福寺」は、現在の徳島市川内町鶴島の宝福寺をいう。山号・院号を鶴頭山・普門院という。

(8) 真明が阿波で書写した後、本書を持って高野山に行ったということも考えることができる。

(9) 願勝寺伝存の位牌には、「**カ**傳燈大阿遮梨法印快明上人」「慶応三丁卯年／九月廿八日寂」とある。また、『諸尊要抄』卷四(4箱7)の奥書には「嘉

永二己酉歲六月中旬書写之了／法印快明生廿八」とあり、『金剛界發慧抄』卷上(2箱1)の奥書からは嘉永五(一八五二)年に三十一歳であったことがわかる。

(10) 宝積寺については、『三寶院幸心方傳受記』一冊(17棚21)の本奥書に「文化二丙寅春正月良辰以高野山慈光／院藏本勞弟子速成房令書寫校合之焉／東豫川ノ江宝積寺住侶英峯」とあることから、その所在がわかる。また英峯の仮名は妙嚴房であり、寛政九(一七九七)年に二十四歳であったことが『金剛界發慧抄』卷上(2箱1)の奥書からわかる。

(11) 願勝寺伝存の位牌には、「**カ**少僧正法印快淵大和尚」「佐伯快淵 能書家号松堂南田／明治四十一年旧五月十五日遷化／享年七十五 嗣法快琳」とある。

(12) 萬福寺は、現在的那賀郡那賀町(旧相生町)延野にあり、山号を円明山と称す。

(13) 大滝山は、現在の徳島市寺町にあった持明院をいう。

(14) 顕潮山来福寺は、現在の徳島市寺町にある紫雲山来福寺をいう。古くは山号を顕潮山と称した。快淵上人は、文久三年九月二十六日に隆祥から『悉曇十八章双紙』一冊(5箱10)を伝授されている。これも来福寺で伝授されたものであろう。

(15) 榮嚴が高野山で『阿字觀』を修したことは、『密教大辭典縮刷版』(法蔵館、平成十九年十月縮刷版第十刷) による。

(16) それぞれの僧侶について、奥書などから知り得る情報を示すと次のようである。

快心：『真俗狂詠雜談』(16棚23)の表紙には「成々道人快應記」の墨書があり、「空々庵成々道人快應録記／愚老九十歲草稿也／明治十一年戊寅二月吉祥日夜燈下書」の奥書がある。また、「于時天保十二年辛丑初春吉辰空々庵成々道人快應／草稿」の奥書を有する『五時説相夜話』(2棚24)の内題下に「快應大成房記」とある。

覚芽：『般若心經秘鍵問題』(13棚38、20棚23)の表紙に「永照院覺芽カ」と墨書される。

寛悟：『神宮秘傳問答』(17棚33)の表紙に「寛悟之」と墨書される。  
深亮：『悉曇字記講用』(7箱6)の内題下に「深亮」の朱印があり、表紙

に「深亮」の墨書がある。また、「享保元年霜月下旬和州東安堵／覺城阿  
闍梨字記講談之御書／寫之了 沙門深亮<sup>卅</sup>」の奥書がある。

泰雄：『眞言宗法衣之事』（8棚B16）の表紙に「大滝山／泰雄」と墨書さ  
れる。

琢心房：『宗義論手帳』（1箱15）の遊紙表に「金剛佛子琢心房求之」と墨  
書される。

鉄周：『即身義開蒙捷圖』（14棚23）の奥書「貞享三<sup>丙寅</sup>年仲冬日書寫之了 沙門  
智光（印）」の部分に「鉄周」の朱印がある。

宥長：『作法集口訣』（7箱18）奥書に「右正徳五<sup>乙未</sup>之春以普雄師御本倉卒  
／寫之了阿陽<sup>於</sup>徳府寺町來福寺會下有長／寫」とあり、表紙・扉に「宥長」  
の墨書がある。

龍環哲心房：『宿曜要訣』（13棚44）の最終丁裏に「阿陽名西郡高原村平安  
山寶光寺／苾芻龍寶末資沙弥龍環藏書」の墨書、表紙・序題下に「龍環藏」  
の朱印がある。『伽陀假博士』（16棚11）には、「維時慶應第三丁卯年十月  
拌寫了／哲應」の奥書があり、表紙に「醫光院／龍環」、扉に「醫光院／  
龍環哲應藏」の墨書がある。『悉曇聞書』（20棚2）には「安政四丁巳歲八  
月中院改之／名西郡高原村／寶光寺會下哲應之所持／十七才之時」の奥書  
があり、表紙に「龍環藏」の朱印がある。

隆祥：『悉曇十八章双紙』（5箱10）の奥書に「授與快淵大士畢／皆文久三  
年癸亥九月二十六日／傳授<sup>ヲ</sup>隆祥（花押）」とある。

隆僊：『宿曜經并曆象徧科文』（17棚14）の表紙に「隨心院隆僊」の墨書、  
扉題下に「隆僊持」の墨書がある。

大滝山（持明院）：『渭水聞見録拔書』（2箱103）の表紙に「大滝山不出」  
の墨書がある。

明王寺：『秘密要鑑』（15棚21）の序題右傍、最終丁に「阿闍徳嶋／明王密  
寺」の朱印がある。現在の徳島市中前川町に所在する。山号・院号を如意  
宝山・大勝院と称す。

(17)『權少僧正佐伯快淵履歷』の「興隆」の項目には「佛具書籍凡三百円」の  
記載がある。「三百円」のうちのいくらが書籍の代金として支出されたのか、  
どのような意図で、どのような書籍を購入したのかは不明であるが、快淵上  
人が書籍購入に積極的であったことがうかがえる。

【付記】本稿は、平成二十四年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）、課  
題番号・二二五二〇四七一）「国語史資料・学習史資料開発のための近世地  
方寺院伝存文献の調査研究」（研究代表者、原卓志）による研究成果の一部  
である。寶壺山願勝寺住職、津田簞史様には、貴重な文献の調査をお許しい  
ただくとともに、長期間にわたる調査に対して、さまざまに御厚情を賜った。  
ここに記して衷心より御礼申し上げます。

# Learning, transcription and possession of documentary records by Buddhist priests at Hokozan– Ganshoji Temple :

—— With special focus on the Venerable Gigo, the Venerable Kaimyo, and the Venerable Kaien ——

HARA Takuji

Hokozan Ganshoji Temple (寶壺山願勝寺) possesses more than 1,000 documentary records published or transcribed between the Edo Period through Meiji Period. These documentary records are the learning materials as well as the record of their learning, transcribed and read deeply through successive generations by chief priests and disciples at Ganshoji Temple.

In this article, I focus on three chief priests, namely Gigo (義剛), Kaimyo (快明) and Kaien (快淵), who left considerable number of books of transcription and of own possession. Using their transcribed books as sources, I will examine their transcription activities chronologically to analyze the place and context of transcription activities. Then based on the analysis and comparison of contents of transcribed documentary records, I argue that accumulation of documentary records on practical learning on the Buddhism has influenced not only subsequent transcribing activities on the practical aspect of the Buddhism but also learning on theoretical aspect of the Buddhism. I shed light on a few aspects of the learning by the three chief priests on the basis of the contents of books of their possession.